

Angria 王国との訣別

— Charlotte Brontë の Juvenilia (8) —

和 知 誠 之 助

1839年4月 Charlotte Brontë は23才の春を迎え、牧師館で老いた父や二人の妹たちとの静かないこいの中で、時に Ellen Nussey や Mary Taylor を訪れたり彼らの訪問を受けたりして、楽しい日々を送っていた。しかし静穏な日々の中にも、一家の主柱としての彼女は、生活設計の確立のために心を労さねばならなかった。4月8日、かねてから自活を望んでいた Anne が Mirfield にある Blake Hall の Mrs. Ingham の子供たちの家庭教師として家を出た。それから数週間後の5月には、Charlotte は、父と Emily および Bradford での挫折後帰郷している Branwell とを Haworth に残して、Keighley の近くの Stonegappe に住む Sidgwick 家の家庭教師として牧師館を後にした。しかしそれも二カ月足らずで辞し、Charlotte は再び Haworth に帰っている。

Mrs. Sidgwick は、Charlotte も認めているように、気立てがよく愛想のいい女性だと一般に見られていたようであるが、人一倍自尊心が強く感受性の鋭い Charlotte、「あくびをしたり手にも負えない子供たちに無味乾燥な基礎的知識を授けること——鋭敏なら立ち易い性格のため彼女には全く不向きな嫌なこと」¹⁾と家庭教師の仕事を見ている Charlotte にとって、幼ない子供の世話や雑事を強要されて人格を認められない家庭教師という職は、いかに一家の家計のためとはいえ堪えがたかったのであろう。「夫人は私の性

1) “Captain Henry Hastings” in *Five Novellettes* by Charlotte Brontë (ed. Winifred Gérin), p. 243.

格を知らないし、知ろうともしていない¹⁾と、Mrs. Sidgwick から無視されることに立腹したり、「家庭教師は退屈な勤めを果すものとしてしか存在しないし、生きている理性ある存在と考えられないということを、今はこれまで以上にはっきりと分ります²⁾」と親友や妹に訴えたりして、苦しみを軽減させようと努めている。

Sidgwick 家での家庭教師としての勤めは 結局二カ月足らずで終わっているが、この間の経験は *Jane Eyre* の中に生かされている。一つは Mrs. Sidgwick の父 Mr. Greenwood の別荘のある Swarcliffe にいた頃 Norton Coyers の邸を見に行き、その屋敷に関連した狂気の女性のことを聞いたことと、もう一つは大きな邸宅での来客の馬鹿騒ぎと片限で無視される家庭教師の惨めさを身にしみて感じたことである。

... I will only ask you to imagine the miseries of a reserved wretch like me, thrown at once into the midst of a large family—proud as peacocks and wealthy as Jews—at a time when they were particularly gay, when the house was full of company—all strangers, people whose faces I had never seen before—in this state of things having the charge given me of a set of pampered, spilt, and turbulent children, whom I was expected constantly to amuse as well as instruct...³⁾

ここに述べられている感情は、*Jane Eyre* において、Thornfield 邸における Miss Ingram など多勢の傲慢な男女の来訪の場面で「孔雀のように傲慢でユダヤ人のように富裕な」男女の戯画化に用いられている。

Charlotte は Sidgwick 家での家庭教師の屈辱を逃れてわが家に帰った後は、1841年の3月初めに再び Mrs. White の子供たちの家庭教師になるまで二年近くの間 Haworth で過すことになるが、この期間は彼女の精神の大

1) Letter to Ellen Nussey, June 30, 1839 [Swarcliffe].

2) Letter to Emily J. Brontë, June 8, 1839 [Stonegappe].

3) Letter to Ellen Nussey, June 30, 1839 (Swarcliffe).

きな転回を印す時期となる。Haworth のわが家で再び自由な時を得るや否や Charlotte は新しい物語を書き始めた。その物語の冒頭に「この前の物語を書き終えた時、何か書くべきことができるまでもうこれ以上書くまいと私は堅く決意した」と述べ、更に再びペンを取るまでには何年間も過ぎるだろうと思った、と記している。がその決意にもかかわらず再び敢てペンを取り上げたことは、彼女が新しい方向の自覚に促されたことを推測させるに十分である。

Caroline Vernon Angria 物語の最後で最上のものと見られているこの激しい愛の物語は、情熱的で甘い夢に耽る Caroline (Percy と Louisa Vernon との間に生れた) が、幼時から庇護を受けている Zamorna の誘惑に陥る物語である。原稿には製作の日付は記されていないが、Winifred Gérin は、作中の内容と作者の言動から、1839年6月29日に書き始められ、同年12月7日に書き終えられたと考¹⁾えている。この物語の最初に、前の物語を書いてから三カ月たらずしか経っていないと記してあるし、6月30日付の Ellen Nussey あての手紙は Mrs. Sidgwick に従って出かけた Swarcliffe にある別荘から書かれているが、その中で Ellen にすぐ便りを欲しいと願いながらも、便りのある前に家に帰っているかも知れないと付け加え、更に7月26日付の手紙には、一週間前に Stone-Gappe を去ったと記してあるので、Charlotte は恐らく7月19日に Sidgwick 家を去り、Haworth に帰った後にこの物語を書き始めたのであろう。

この物語における Caroline は15才の既によく成育した少女で、Zamorna に育てられている。Caroline の父である Percy が、彼女を Zamorna から引き取って別の家に住ませようとする、大人扱いされて社交界に入ることが望んでいた彼女は一時は興奮して喜ぶが、Zamorna との別れを悲しむ。そして四カ月間パリーで過ごした彼女は、多くの人々からもてはやされて自らの美貌に自信を持つようになるが、夢想と現実との違いを覚り、反対する父

1) Introduction to "Caroline Vernon" in *Five Novelettes*, p. 273.

を説得してパリーを去り、首都 Verdopolis に帰る。そして Zamorna との再会を想って胸をときめかすが、Zamorna が首都に来る前に Percy によって遠隔の地に去らされる。しかし Zamorna への思慕に堪え切れなくなった Caroline は、雪の降るある冬の夜¹⁾ 一人で馬車に乗って Zamorna を訪れ、抱きしめられる。そして Zamorna から、誰にも邪魔されない所に隠まってやるが来るかと問われると、怖れと愛情とに胸を震わせながら “Yes” と答える。その後 Zamorna は Percy から Caroline の居所を尋ねられるが、拒絶する。立腹した Percy は彼をピストルで殴打して傷つけたり、裁判に訴えても悪業を暴いてやるなどと怒るが、Zamorna は平然として答えない。

以上がこの物語の概略であるが、女主人公の Caroline Vernon とその母 Louisa とは、それ以前のいくつかの物語に登場している。Louisa は、最初 *Passing Events* (“The History of Angria III”) (April, 1836) に、Louisa Vernon の名も挙げられているが、Louisa Dance の名で Zamorna にかくまわれている27才の ‘she-tigress’²⁾ として登場し、冷淡な Zamorna の手に噛みついたりする。彼女はその後散策の許しを得ると、背の高い紳士の馬車で去り、その後消息が知れないとされている。*The Return of Zamorna* (December, 1836) における Louisa は、Miss Mary Percy に向かって、自分は彼女の父を魅了し、彼に妻や友を捨てさせ、アフリカに革命を起させる力を持ったことのある女だと叫ぶ。³⁾ *Julia* (June, 1837) においては Louisa およびその子 Caroline は、Percy に頼まれた Zamorna の邸宅で暮している。元オペラ歌手の Louisa は、黒い眼をした気まぐれな ‘the little Syren’ で、Zamorna に対して激しい愛情と憎悪を狂気のように交錯させるが、Caroline (‘a childish figure, clad in white, a creature with dark hair & Italian

1) 自然描写に、アフリカでなく Haworth 付近の情景が取り入れられるようになったのは、この頃の作品に目立つ傾向である。

2) *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Branwell Brontë* (The Shakespeare Head Brontë) [以下 *Miscellaneous Writings* と略す], Vol. II, p. 138.

3) *Ibid.*, p. 308.

eyes¹⁾’)も ‘Fitful as April in her moods’²⁾と言われる気まぐれな私の強い少女で、Zamorna に向かって “. . . when I’m old enough I’ll marry you—I will, and I often tell mamma so—just to put her in a passion.”³⁾と言ったりする。

断片的に扱われていたこれらの人間関係が *The Duke of Zamorna* (July, 1838) においては整理されている。Louisa はかつて Vernon 卿に結婚を約束させるが、Percy を知ると Vernon を捨て、Percy が国外に去ると再び Vernon を言いくるめて結婚させる。数年後 Percy が帰国すると、彼女は再び Vernon を捨てて Percy に走り、10年間ぐらい彼に付き纏うが、Percy は ‘the leech’ に我慢できなくなり、彼女との間にできた Caroline とともに Louisa を Zamorna に預けて厄介払いをする。Louisa は Zamorna の魅力に取りつかれることもあるが、相手にされないのので、激しい欲情と憎悪とを交錯させて次のように叫んだりする——

“I do hate you! —I abhor you!—I could kill you!” she said, grinding her teeth, and then, crying afresh, she added: “But still, still —I love you too till my heart aches as if it would break.”⁴⁾

このような Louisa 像は、*Passing Events* や *Julia* に描かれたものと同一線上のものである。そして Caroline も、11才の背の高い美しい少女として Zamorna に養育されており、熱烈な性格だが、まだ汚れを知らぬ少女として登場する。

Caroline Vernon の丁度前に書かれた *Captain Henry Hastings* (1839) には Caroline Vernon の名の女性は登場しない。しかし Sir William が散策中の Elizabeth Hastings に会って、墓地の中で見つけた “RESURGAM” の墓碑銘は、Zamorna への烈しすぎる愛のために自らの生命を絶っ

1) *Five Novelettes*, p. 113.

2) *Ibid.*, p. 114.

3) *Ibid.*, p. 115.

4) *Ibid.*, p. 368.

た Rosamund Wellesley のものだと語る個所があるが、この挿話は *Caroline Vernon* における Caroline の運命を暗示しており、Charlotte はこのテーマをすでに温ためていたように思われる。Rosamund を自殺に追いやった経緯を Sir William は次のように語る――

“Killed herself! do you mean? why?”

“Because she was ashamed of having loved his majesty not wisely but too well—I remember seeing her, she was very beautiful . . . figure & complexion—very tall & graceful—with light hair & fine blue eyes . . . clever, I daresay, & sensitive. The Duke undertook to be her Guardian & Tutor—He executed his office in a manner peculiar to himself—Guarded her with a vengeance & tutored her till she could construe the Art of Love at any rate—She enjoyed the benefit of his protection & instructions for about a year—& then somehow she began to pine away. awkward¹⁾ little reports were spread—she got to hear them. her relations insisted upon it that she should leave her Royal Mentor—He swore she should not, they persisted in claiming her, so his Majesty sequestered her in one of his remote haunts out of their reach. then he dared them to come into the heart of his kingdom & fetch her out—She did not give them the chance. Shame & Horror, I suppose, had worked her feelings into Delirium & she died very suddenly—whether fairly or not Heaven knows. Here she²⁾ was interred, & this is the Stone Her Lover laid over her. . . .”

Caroline Vernon における Caroline はこの Rosamund と全く同じではない。Caroline の髪も目も Rosamund とは違って黒色であり、Rosamund のように自ら命を断つところまでは描かれていない。しかしその他の状況はほとんど同じであり、Caroline も悲劇的運命を辿るであろうことは、作者の構想の中に入っていたように思われる。

1) 原文のまま

2) *Ibid.*, p. 254.

ところで、この物語で第一に着目される点は、Charlotte のリアリズムへの志向である。依然として Byronic hero への心酔は見られるが、そうした華やかな夢への傾斜とありのままの現実とを融合しようとする努力が種々の面で読み取られる。

一つは主人公 Zamorna の人間像の変化である。彼は依然として絶対的な権力の持主で、征服や愛に強い力を発揮するが、以前の物語とは違って、その美しい心や容姿を称えられることなく、利己的な遊蕩者としての面が強調されることが多い。

... the selfish Zamorna ... He has too little of the moral Great-Heart in his nature, it is his creed that all things bright & fair live for him—by him they are to be gathered & worn as the flowers of his Laurel Crown—The green leaves are victory in battle—they never fade, the roses are conquests in Love—they decay & drop off—Fresh ones blow round him, are plucked & woven with the withered stem of their predecessors—such a wreath he deems a glory about his temples, he may in the end find it rather like the snaky fillet which compressed Calchas's brows, steeped in blue venom.¹⁾

このように、美しいものはすべて自分のために存在すると考え、一つの美が枯れ萎むと、また次の美を摘み取るのを当然とするような自己中心的な Zamorna は 'Satan's eldest Son'²⁾ であり、その黒く大きな目は「炎熱地獄の底からの炎にあかあかと輝く³⁾」のである。

Zamorna と Caroline との関係は、当時世の中を驚かせた Byron と Claire Clairemont との関係から示唆を受けたようである。Claire は *Enquiry Concerning Political Justice* (1793) を書いて、若き Shelley などにもア

1) *Ibid.*, p. 352.

2), 3) *Ibid.*, p. 353.

ナーキズムへの影響を及ぼした William Godwin の娘であり、Shelley と一緒に大陸に駆け落ちし、彼の最初の妻 Harriet の自殺後、彼の妻となった Mary Godwin¹⁾ の異母妹に当る。彼女は Byron に熱烈な恋文を書き、当時世のあらゆる悪罵に堪えかねて大陸へ逃亡しようとしていた Byron の気まぐれから一夜を共に過し、彼が大陸に去ると、Shelley と Mary とに同行してジュネーブで Byron に会う。その後も、彼女を愚かな女と軽蔑し、どうしても逢おうとしない Byron に付き纏い、特に二人の間に生れた娘 Allegra の養育のことで Byron と争い、彼の錯雑した生涯に哀れな女性として悲惨な姿をとどめている。Byron にも勿論美しい高貴な性格があったが、彼の Claire との関係においては、その最初の出会いが愛情のかけらもない一時的な退屈しのぎからであったように、その人間的美点は少しも見られず、Claire 自身に対しても、またひどい尼院に暮らし、やがて流行病で死亡する Allegra に対しても、彼は全く自分勝手な冷酷な男として終始し、醜く低劣な性格のみを露呈している。

Zamorna は Byron のこのような悪魔的な自己中心的遊蕩者としての面を写していて、Caroline も Claire Clairemont の最初の頃の熱狂性を反映している。炎と水とが常に心の中で共に暴れ狂っていた Byron、蕩児であると共に激しい自我の欲求にのた打ち廻った Byron の家の紋所に刻まれたモットーである“Crede Birone”（バイロンを信ぜよ）にならって、Zamorna が“Crede Zamorna”²⁾ と叫ぶと、Caroline は怖れと共に抵抗しがたい魅力に取りつかれる。魅力が悪魔の声であることを知っていたから怖れを感じたのである。しかも「多くの心の中に毒を吹き込んだ致命的な優しさのこもる声」³⁾ で隠れ家に同行するかと尋ねられると、「荒々しいまでの熱狂さ」⁴⁾ をこめて

1) Mary Wollstonecraft Godwin (1797—1851). 彼女は William Godwin と Mary Wollstonecraft との間に生れ、1816年 Shelley の正妻となり Mary Wollstonecraft Shelley と名を改める。 *Frankenstein or The Modern Prometheus* (1818) を初め、いくつかロマンスを書いている。

2) *Five Novellettes*, p. 353.

3), 4) *Ibid.*, p. 354.

“Yes” と答えるのである。

Zamornaに誘われて人里離れた隠れ家に彼の情婦として同行したCarolineの、その後の成り行きについては何ら述べられていないが、Zamornaの悪魔性から彼女の運命は、ByronによるClaireの運命が連想される。即ち前述したように、*Captain Henry Hastings*におけるRosamundの悲劇が暗示されている。この点からも、長い間うなされるように取りつかれていたByron熱から醒めたCharlotteは、Byron的自我の強さや狂熱さに、以前と違った批判的な目を向け始めると言えよう。

この物語は最初Fannie E. Ratchfordによって*Legends of Angria* (1933)に発表されたが、Winifred Gérinは原稿を解読したものをそのまま*Five Novelettes* (1971)に発表した。それにはF. E. Ratchfordが省略した部分のみでなく、二つの個所についてはCharlotte Brontëの最初の草稿(F. E. Ratchfordはそのうちの一つは最初の草稿、他は書き換えたものを発表している)を付録として載せ、Charlotteが書き換えたものを主体として収録しているので、両者を比較すると、Charlotteのこの時期における創作態度のいくつかを明らかにすることができる。

Carolineは美しい少女だが、歓楽に耽りがちな放縦な少女で、Zamornaは彼女のことをPercyに次のように説明する――

“... I have studied her character—it is one that ought not to be exposed to dazzling temptation—She is at once careless & imaginative—her feelings are mixed with her passions—both are warm & she never reflects . . .”¹⁾

Carolineは未熟で気まぐれで軽率で、しかも美しくありたいと熱望し、空中楼阁をえがいて憧れに身を焦がす少女である。Byronに心酔する彼女のロマン性が、最初の草稿では次のように指摘される――

... Caroline has grown up under his (i. e. Zamorna's) care a fine

1) *Five Novelettes*, p. 296. (*Legends of Angria*, p. 227.)

& accomplished Girl—unspoilt by Flattery—unused to compliment—unhackneyed in trite fashionable conventionalities—Fresh, naïve & romantic, really romantic—throwing her heart & soul into her dreams, Longing only for an opportunity to do what she feels she could do—to die for somebody she Loves—that is, not actually to become a subject for the undertaker—but to give up heart, soul, sensations to one adored Hero—to lose Independent Existence in the perfect adoption of her Lover's Being. . . .¹⁾

ここには単調で平凡な生活を嫌い冒険的な恋に憧れる Caroline の性格が浮き彫りにされている。このように浅薄とも言えるほどのロマンへの夢が強調される Caroline が、その夢の具体化として偶像視している Zamorna に心身を委ねることは、自然な成り行きと思えるように描かれている。最初の草稿によると、第一部において、Caroline は Zamorna のもとを去る前夜、彼への愛を告白して彼の冷淡さに泣くが、Zamorna もやがて泣き悲しむ彼女を抱きしめて慰める、というようにある程度両者の愛情が確認されている。そして Caroline は、「女性がこの世の初め以来果実をもぎ取った葡萄畑で——経験という葡萄畑で葡萄を集める一人²⁾」であり、「熱情と罪と苦惱³⁾」を経験することになろうと付け加えられている。

これに対し、書き換えられた原稿では、その情景はずっと簡略に扱われるのみでなく、Caroline は別れに当っての Zamorna の冷たさを悲しむだけで、愛情の告白はしない。そして彼の言葉によってではなく、声の調子によって、彼から子供扱いされていないとの確信を得て心を安める。最初の草稿におけるように、最初の別れの段階で両者の愛情を確認させることなく、このように曖昧にしておいた方が、第二部における Caroline の Zamorna への愛を一層現実性を帯びた苦しいものにさせている。そして Zamorna が自

1) "Appendix" to *Five Novelettes*, p. 364 (*Legends of Angria*, p. 200).

2) *Ibid.*, p. 363 (*Legends of Angria*, p. 259).

3) *Ibid.*, p. 364 (*Legends of Angria*, p. 260).

分の養育している無垢な少女を愛するという非現実性からも脱し得ている。

愛を夢見る愚かな少女に過ぎなかった Caroline も、第二部においては急速な成熟をする。華やかなパリーでの社交界での四カ月の経験は、「周囲の華やかな上流社会で行なわれていることへの軽蔑¹⁾」を彼女に感じさせる。――

... she changed fast in the Atmosphere of Paris—She saw quickly into many things that were dark to her before. She learnt life & unlearnt much fiction . . . she wondered¹⁾ at her own rawness when she discovered the difference between the world's reality & her childhood romance—She had a way of thinking to herself & of comparing what she saw with what she imagined. by dint of shrewd observation she made discoveries concerning men & things which sometimes astounded her, & she got hold of books which helped her in the pursuit of knowledge—she lost her simplicity by this means & she grew knowing & in a sense reflective . . .²⁾

鋭い観察力と書物の助けによって「人生を知り多くの虚構を捨てる」Caroline のすがたは、この時期における Charlotte 自身のすがたでもあるが、Caroline の最も大きな発見は、Zamorna が少女の夢でひとり思い描いていた完全無欠な男ではなく、他の人以上に放埒な悪い男であること、Mina Laury を情婦としており、王妃の Mary をも絶えず苦しめていると聞かされたことである。この時の彼女の感情は、“not exactly painful, they were strange, new & startling”³⁾と記されている。それにも拘らず“sufficiently romantic, wilful & infatuated”⁴⁾な Caroline は、Zamorna への思慕をさらに募らせて行き、彼の誘惑に身を任ねることになる。

Kathleen Tillotson は、Caroline が Zamorna に抵抗しないところに、

1) *Ibid.*, p. 320 (*Legends of Angria*, p. 264).

2) *Ibid.*, p. 319 (*Legends of Angria*, pp. 263—264).

3) *Ibid.*, p. 323.

4) *Ibid.*, p. 338.

「貴族的な混乱した熱情および作者の経験から遠い Angria の世界の致命的な制約¹⁾」を見ている。また Winifred Gérin は、Caroline の Zamorna への惑溺は、Claire Clairmont が Byron を追いかけるほどの嫌らしさを感じさせず、率直で感動的だとしながらも、Charlotte の後の作品に見られるような劇的な詩のペイソスと強烈さに欠けていると論じている——

... what would constitute the whole difference between Jane Eyre and Caroline Vernon, between Lucy Snowe and Mina Laury, would precisely lie in the later heroines' power of conscience to reject temptation. This it would be that would invest mere fiction with the pathos and intensity of poetry—of dramatic poetry one might venture to add. But before such rarefied heights could be attained Charlotte herself had a long way to struggle up the thorny path of life.²⁾

Caroline には Zamorna の誘惑を退ける良心の力が不足していたが、Jane Eyre や Lucy Snowe にはそれがあるが故に *Jane Eyre* と *Villette* の「詩のペイソスと強烈さ」が見られるとする Winifred Gérin の説は興味深い。

しかし Charlotte が Caroline をして Zamorna の誘いに従わせたことは、それまでの作品で多くの女性が Zamorna に魅了されて、盲目的に従って行ったとは異なって、むしろ彼女が Angria の世界の限界を感じてそれに批判的になったことを示してはいないだろうか。何故かと言えば、Zamorna は以前のような絶対的な存在ではなく、Caroline もそれを知っており、以前の作品に登場する女性とは違って、自らの強い意志と感情を持つ女性であるからである。最初の草稿においても Angria 物語における白昼夢の空しい愚かしさに批判の矢が向けられているが、Caroline の Zamorna への盲目的な傾斜は、あまりにも Angria 的であり真実性に乏しい憾みがあることを、Charlotte は自覚して、書き換えたに違いない。書き換えによって彼女は、

1) *Novels of the Eighteen-Forties*, p. 272.

2) *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius*, p. 135.

Caroline 自身が Zamorna を見る目を変える 経験¹⁾を積むまで、二人の関係の進展を保留しようとしたのである。しかも Caroline は、他に比すべきものがない絶対的な存在として 憧憬¹⁾を捧げていた Zamorna が、そのような崇拜に値しない男で多くの欠点に汚れていると知った後でさえも、彼の声に抵抗できずに従って行く。その時の Caroline は、もはや Zamorna についての “illusions” に惑わされている夢見る少女ではなく、「世の中の現実と子供時代のロマンスとの相違」を発見した大人である。

これは、それまでの Angria の世界に見られぬ愛のありようではない。Charlotte はこれまで、衝動的な情熱に浮かされた愛のさまざまな様相を、Zamorna をめぐる多くの女性に描き続けて来たが、作者はここではそうしたいわば恋を恋する少女の観念的な愛や盲従的な愛ではなく、Charlotte という一人の女の求める愛の真実に鋭い探究の目を向け始めたと言えないであろうか。勿論 Caroline のあり方が Charlotte の求めた方向という訳ではなく、むしろそれは Charlotte にとっては危険な方向である。それは Caroline にとっては自然であるとしても、結局破滅を招来することを暗示すること、換言すれば Angria の ‘infernal world’ を否定することによって、Charlotte は自らの愛の方向を直接的にではなく、逆説的に表現していると言える。そして Zamorna の魅力に抗し切れない Caroline に、女としての悲しさをにじませるといふ逆説的表現をする、というその点に、Charlotte の真実をまぎぐる苦闘を見ることが出来る。

愛の真実を探究する Charlotte の苦闘はさまざまな形で続けられる。この Caroline Vernon の前に書かれた *Captain Henry Hastings* (1839) における Elizabeth は William の誘惑を斥けたが、それは *Jane Eyre* における Jane が Rochester の誘いを拒絶するのに通じていることは、既に見た通

1) “. . . He is himself—a kind of Abstract Isolated Being—quite distinct from aught beside under the sun . . .” (*Five Novelettes*, p. 315; *Legends of Angria*, p. 253).

りである。¹⁾ 妻ある男または夫ある女との愛の問題は、Charlotte 自身もやがて経験する課題である。一つは彼女のブリュッセル留学の時の師 M. Heger に対する愛であり、他は弟 Branwell の彼が家庭教師をしていた Robinson 夫人との関係である。

この作が書かれて6年あまり後の1845年6月に Branwell は Robinson 家での家庭教師の職を解雇された。それは Mrs. Robinsen との不義の嫌疑を受けたためである。それについては明白な証拠は何も発見されていないが、それについて Charlotte は Branwell に絶望し彼を許そうとしなかった。Winifred Gérin はこれに関して次のように述べている――

... Had Branwell committed any other cardinal sin at that time Charlotte might have found it in her heart to forgive him. But he had ignominiously yielded, so she judged, to the very temptation it had been her Purgatory to resist. She had come through the purifying flame too recently herself to have much pity²⁾ left for those who, like her brother, had fallen by the wayside.

Charlotte はブリュッセルでの留学を終えて帰国した後も M. Heger への思慕を抑え切ることができず、彼からの便りの得られないことに身を切る苦しみを嘗めながら、四通の手紙に激烈な情を書き送ったことはよく知られているが、Branwell の事件が起きた頃は、彼女もようやく M. Heger への思慕に打ち勝ったばかりの時であり、彼女は不義に屈した弟を許すことができなかったのだ、と Winifred Gérin は解釈している訳である。Charlotte は Angria 的愛のあり方を既に越えており、愛の倫理を現実の中に直視していた。それに反して Branwell はいつまでも Angria 的世界に溺れて現実に敗退して行ったことが、Charlotte に激しい苦しみを与えたのであろう。彼女のこうした生き方には、勿論清教主義的倫理観を容易に指摘できるが、

1) 拙稿「Charlotte Brontë の最初の自画像——Charlotte Brontë の Juvenilia (7)——」
 (『甲南女子大学英文学研究』, 第10号)

2) *Charlotte Brontë*, p. 296.

Emily Brontë の純粹な烈しさと比較して、Charlotte の愛の概念が常識的で現実的だとして、簡単に低く評価するだけで済まされるであろうか。Emily については別の機会に考えたいが、Charlotte にあっても、生きること、愛することは、彼女のような状況においては、いかに苦しいことであつたか、彼女がその小さな、あまり美しくもない容姿に引け目を感じながらも、主婦がわりの長女としての責任を身体一杯に背負って、懸命に小さな魂を燃焼させようと、いかに苦闘したかを忘れてはならないのである。

Caroline Vernon は Charlotte Brontë 自身ではない。しかし Charlotte の一面かもしれない。彼女はその後も Caroline のような少女の運命に関心を持ち続け、その分身は *Jane Eyre* における Adèle として再び姿を現わすことになる。パリーの踊り子であつた Céline Varens と遊蕩時代の Rochester との間に生れた Adèle は、母の死後 Rochester に引き取られる点は、この物語の Caroline の場合と類似している。しかし Jane から教えを受けるという違いもあって、彼女は Caroline のような破局的な運命を辿ることはない。そして Rochester に誘われるのは養育されている Adèle ではなく Jane である、というように、*Caroline Vernon* における状況が変化させられているのは意味深い。

“Farewell to Angria” (1839)

1838年3月に Miss Wooler の学校での教師生活をやめて Haworth に帰った時、Charlotte は22才に近づいていた。この頃からの彼女の作品に realism の傾向が顕著になって来たことは既に見て来た通りである。この年1月に書かれた *Mina Laury* においても、Angria の国はイギリスの風土を思わせる背景におかれ、雪や嵐が吹き荒れる。背景のみでなく作中人物にも変化が見られ、Zamorna や Percy などの従来のも主要人物が精彩を失うのに引き代えて、作者自身や弟の分身が登場することからも明らかのように、Charlotte は Angria 的なものから次第に遠ざかりかけていた。これは簡単に言えば、Charlotte 自身の内部における、少女的な夢幻の世界への陶醉から現実の直

視への転換が原因である。1841年1月に彼女は次のように書いている——

. . . Once indeed I was very poetical, when I was sixteen, seventeen, eighteen and nineteen years old—but I am now twenty-four approaching twenty-five—and the intermediate years are those which begin to rob life of some of its superfluous colouring. At this age it is time that the imagination should be pruned and trimmed—that the judgment should be cultivated—and a *few* at least, of the countless illusions of early youth should be cleared away. I have not written poetry for a long while.¹⁾

詩を長い間書いていないということは一つの現象に過ぎないことは言うまでもないが、10才代を過ぎ20才代の半ばに達しようとする年齢になって、少女時代の「無数の幻想の、少なくとも少数を払いのけるべき時」だとの言葉は、現実との冷静な対決の姿勢を示している。このようないわば客観的な姿勢は、1839年の終り頃に書かれたと推定される“Farewell to Angria”に香りが高く表現されている。習作時代の最後を印づけるこの断片は、麻薬的夢の世界に長く住み続けることの危険を自覚した Charlotte の、自らの抑えがたい内的欲求との苦闘の終結宣言であると同時に、幻想と現実との調和、想像力と現実体験との融合を旨とした新らしい局面への出発の合図でもある。²⁾少し長いけれども次にその全文を訳出してみよう。

私は今までに多くの本を書き、長い間同じ人物や情景や題材に思いをめぐらしてきた。私の風景を、朝・昼および夜——昇る朝日、正午の太陽および沈む夕日の与える限りの、多様な影と光の中で描いてきた。冬の白い嵐で空気をあふれさせたこともある。ぶなや樫の木の黒い枝は雪で浮彫りされ、低地の園や荒涼とした地帯の山道には雪が降りたまつた。しかも森に囲まれた邸宅、峡谷のある荒野も、夏になると月の光でやわらかな色を帯

1) Letter to Henry Nussey, January 11, 1841.

2) Hanson は Charlotte の決意は恐らく “the growing separation between herself and Branwell” (*The Four Brontës* by Lawrence & E.M. Hanson, 1949, p. 75) と書いているが、これは全く当たらない。

び、とても暖かい6月の夜には、樹々のこずえには葉が茂り花々で赤く染まった空地に群がった。人物についても同じである。私の読者たちは一群の面だちを見慣れてき、横顔を見たり真正面から見たり、輪郭だけのこともあり、描き終えられたのを見たこともある。思考や感情や気質や年齢で異なるだけであり、愛に照らされたり、熱情で紅潮したり、苦惱でかげったり、恍惚で燃えることもある。沈思や笑いさざめきの中で、悲哀や軽蔑や狂喜の中で、また包み隠しのない幼時、美しく豊かな青春、力あふれる成人や、深い皺を刻み思いに耽る老年の目鼻立ちを見て来た——しかし私たちは変わらなくてはならない。何故ならば、それほど繰り返された今は、すっかり見慣れた情景に目が疲れたからである。

しかし読者よ、あまり急がせないで下さい。私の想像力から、あれほど長い間一杯になっていた人物像を追い払うのは容易ではない。それらは私の友であり親しい知人であったので、昼間私の思いを占め、夜は不思議にも夢の中にまで忍び込んで来た人々の顔や声や行動を描き出すのには、ほとんど苦労もいらぬほどである。これらから去れば、まるでわが家の戸口に立って家族に別れを告げているような感じがする。新しい住人を思い浮かべようとすると、まるで遠い国に入り込んで、どの顔も性格も知らないの、よく調べないと理解できず、大いに手腕を要するような感じがする。それでも私はあまりに長く住みついていたあの燃える風土——空は赤く照り映え——真赤な夕焼けにいつも燃える風土——から暫らくの間立ち去ろうと願っている。——そうすれば、心は興奮から醒め、灰色におだやかに夜が明ける新しい一日も、少なくともひと時は雲のために和らげられるような、冷たい地域に向きを変えよう。

Charlotte が弟や妹たち以外の誰にも明かそうとしなかった *Juvenilia* の秘密を解明するものとして、185行の韻文と350語の散文とで綴られた “We Wove a Web in Childhood” (December, 1835) は非常に貴重な資料であるが、この「アングリシアへの訣別」も Charlotte の資質の展開を見る上で重

要なものである。

Charlotte は Angria への訣別の辞を書いた。しかし F. E. Ratchford も指摘しているように、¹⁾ ロマンへの夢が彼女から完全に消滅したわけではない。それから3年あまり後、彼女がブリュッセルに留学して ‘The black Swan, M. Heger’ の下で教師としての資格を得るために勉学に努めている時、故郷の Branwell にあてた便りの中にも、次のように Angria の世界が狂おしく蘇ってくる苦しみを書き送っている——

It is a curious metaphysical fact that always in the evening when I am in the great dormitory alone, having no other company than a number of beds with white curtains, I always recur as fanatically as ever to the old ideas, the old faces, and the old scenes in the world below.²⁾

‘the world below’ に対するこの断ち切りがたい愛着は、Charlotte の一生を通じて離れなかった。しかしここで注意すべきことは、Angria 的夢想の世界がいつも蘇ってくると表現していることは、それへの烈しい愛着の大きさを語ることによって、それを断ち切る困難の大きさをも暗示していることである。換言すれば、Angria 的世界に長い間ロマンの夢を駆けめぐる後、それを敢然と拒否しようとすることは、一層高い世界へ飛翔しようとの意図が強く基調となっているが、彼女はそれが決して容易なものではないことを感じていたのである。³⁾ Charlotte が後に達した世界は Angria とは異な

1) Cf. *The Brontës' Web of Childhood*, p. 150 and “Introduction” to *Legends of Angria*, p. xlii.

2) Letter to Branwell Brontë, May 1, 1843.

3) Earl A. Knies は F.E. Ratchford がこの “Farewell” を Charlotte の生涯の一里程標としてあまり真剣に取ってはならないと述べた語を引用した後、次のように付け加えている——“What Miss Ratchford does not note, however, is that although the juvenile productions had provided invaluable experience, they had also helped to develop annoying mannerisms that became even more obvious when taken out of their exotic setting.” (*The Art of Charlotte Brontë*, Ohio University Press, 1969, p. 88). これは Charlotte が脱しようとしたものの一面を説明したものである。

った世界である。しかしそれは Angria をある面で否定し、それとは対照的な世界へ揺れ動き、究極的には両者を融合させることによって達成された世界である。それ故、Angria に訣別を告げたことは、Charlotte がその後の作品において Angria 的世界を全面的に捨て去ったことを意味するのでは決していない。Winifred Gérin も “... the ghost of Zamorna haunts the pages of Currer Bell.”¹⁾ と述べているが、Charlotte の Juvenilia とその後の作品とは一見相反するもののように見えながらも、根底においては連続している。ただ Juvenilia に見られる熱狂性・陶醉性は一度は否定されねばならなかった。それによって初めて Juvenilia に内在する観察力・洞察力が、深く多様な経験と鋭い知性によって、客観性を帯び深化されて、真の想像力として実を結ぶことができたのである。

Angria 物語の Zamorna を知ることによって、Rochester や Paul Emanuel についての理解が深められることは否定できない。しかし Rochester も Paul Emanuel も決して Zamorna そのものではない。Caroline Vernon も Adèle Varens と同一ではなく、Elizabeth Hastings も Jane Eyre とは異なっている。そこには Charlotte のその後の種々の経験を通じての人間の成熟が働いていることは論をまたない。その成長の一つの大きな印がここに見られるのである。Angria 物語に見られる “the world below”, あるいは “the infernal world” への麻薬的陶醉は、弟の Branwell にも見られた。しかし彼はそれを客観視することがいつまでもできず、別れを告げることを為し得なかったために、転落の道をころび落ちた。Charlotte は弟とは違って、それを直視して別れを告げるべきだと決意できたところに、彼女の新たな高い世界への飛躍が約束されたのである。

1827年11才の時から1839年23才の時まで、12年に及ぶ Charlotte の Angria の世界での夢想は、彼女の人間としてと同時に、作家としての成長の跡を辿る上で極めて大きな意義をもっている。そして、それに決然と訣別を告げたこともまことに重要であった。Charlotte はこの決意に従ってその後数年間、

1) “General Introduction” to *Five Novelettes*, p. 21.

すなわち 1840 年からブルュッセルより帰国する 1844 年まで何も書いていない。何も書いていない、と言うより書いたものを残していないと言った方が正しい。Mrs. Gaskell は *The Life of Charlotte Brontë* に次のように述べている。

During this winter (i. e. 1840) Charlotte employed her leisure hours in writing a story. Some fragments of the manuscript yet remain, but it is in too small a hand to be read without great fatigue to the eyes; and one cares the less to read it as she herself condemned it, in the preface to 'The Professor,' by saying that in this story she had got over such taste as she might once have had for the 'ornamental and redundant in composition.' The beginning, too, as she acknowledges, was on a scale commensurate with one of Richardson's novels, of seven or eight volumes. I gather some of these particulars from a copy of a letter apparently in reply to one from Wordsworth, to whom she had sent the commencement of the story, some time in the summer of 1840.¹⁾

ここで Mrs. Gaskell は、Charlotte がその物語の最初の部分を Wordsworth に送ったと書いているが、それは間違いで Hartley Coleridge に送ったとするのが正しい。²⁾ この手紙は 1840 年 6 月に書かれたものであるが、Charlotte が H. Coleridge に送った物語の断片は、その後 C. W. Hatfield によって発表された。³⁾ その断片には Alexander Percy とその娘 Miss Percy や Miss Thornton など、Angria 物語でよく登場する人物のほか、新しく Arthur Ripley West などの名も見られるが、場面ははっきりとイギリ

1) *The Life of Charlotte Brontë*, Chap. IX, p. (Everyman's Library).

2), 3) C. W. Hatfield, "Charlotte Brontë and Hartley Coleridge, 1840" (*Brontë Society Transactions*, Part L, No. 1 of Vol. X, pp. 15-24) なおこの手紙の終りの署名 "C. T." が 'Charles Thunder' を意味すると Mrs. Gaskell は述べているが、これは Charlotte が彼女の作品の作者として当時よく用いていた 'Charles Townshend' の略と考える方が適当であろう。

スの Yorkshire に置かれていて、Charlotte の方向転換の意図が明白である。しかし彼女は、H. Coleridge の忠告もあって、その後の成熟を待つことにして、この物語を書き続けることをやめた。H. Coleridge への返事の中の次の言葉がそれを語っている――

The idea of applying to a regular novel publisher, and seeing Mr. West and Mr. Percy at full length, in three volumes, is very tempting, but I think on the whole, from what you say, I had better lock up this precious manuscript, wait patiently till I meet with some rich Maecenas who shall discern and encourage my rising talent . . .¹⁾

これはこの断片が彼女の目指した新たな方向を満足させるものではなかったからである。 *Caroline Vernon* の冒頭においても、既に述べたように、彼女は新しいものが思いつくまでは、たとえ何年経とうとも再び筆を取るまいとの決意にも拘らずまた筆を取ったと述べている。そしてその物語は、作中人物を客観的に観察し深い洞察力をもって描出している点からも、確かに以前の *Angria* 物語とは大いに趣を異にしたものであった。それは静かな調子で始められ、乾草畑で働いている *Zamorna* の姿を描くなど、情景や人物も、従来の *Angria* 物語の華麗な王侯貴族の世界から日常的なものに向けられている。しかし物語が進むにつれて *Louisa Vernon* の狂気じみた錯乱が描かれたり、*Zamorna* もその悪魔的性格を露わにして行き、それに批判的姿勢が見られてはいるが、Charlotte は例のごとく、狂熱的なものに魅かれるのを避け得なかった。そして結局この作も *Angria* 的世界から脱皮しようとした彼女の意向を裏切るものに終わったのであるが、H. Coleridge に送った物語も同様に彼女の新たな意向に添うものでなかったのである。

1846年 Charlotte が Thackeray の *Vanity Fair* を読んで心を打たれ、彼の偉大さを W. S. Williams に書き送った手紙の一節は、彼女が小説の創

1) *Ibid.*, p. 17.

造において何を指していたかを端的に示している――

. . . The more I read Thackeray's works the more certain I am that he stands alone—alone in his sagacity, alone in his truth, alone in his feeling (his feeling, though he makes no noise about it, is about the most genuine that ever lived on a printed page), alone in his power, alone in his simplicity, alone in his self-control. . . he borrows nothing from fever, his is never the energy of delirium—his energy is sage energy, deliberate energy, thoughtful energy. . . Forcible, exciting in its force, still more impressive than exciting, carrying on the interest of the narrative in a flow, deep, full, resistless, it is still quiet—as quiet as reflection, as quiet as memory; and to me there are parts of it that sound as solemn as an oracle. Thackeray is never borne away by his own ardour—he has it under control. . . .

Kathleen Tillotson も指摘しているように²⁾, Charlotte が上の一節で Thackeray の秀れた点として挙げた 'truth' や 'genuine feeling' や 'power' や 'energy' は, Charlotte 自身も共有していた。しかし彼女は 'self-control' や 'quiet' なものには欠けていた。彼女は 'fever' から何も借りることなく, 彼女のもつ 'energy' を 'the energy of delirium' でなく, 'sage energy, deliberate energy, thoughtful energy' にしなければならない。自らの 'ardour' に運び去られることなく 'control' しなければならない。Charlotte のこの自らへの警告が, Thackeray へのこの讃辞となったのであるが, 彼女のこのような小説観が, *Caroline Vernon* において方向転換をさせ, H. Coleridgeに批判を乞うため送った物語を書き続けることを断念させ, ついに Angria への訣別を告げさせたのである。

Charlotte はこのように自らに大きな試練を課したが, それを越えるには苦難にみちた長い年月が必要であった。この Angria への訣別の辞は, その

1) Letter to W.S. Williams, March 29, 1848.

2) *Novels of Eighteen-Forties*, p. 262.

一つの道程であり、彼女の自己発見の前提条件であった。この自己宣言のあと彼女は新たな方向へ苦しい模索を続け、その後数年間の空白に堪えて行き、次第にその資質を十分に発揮する成熟さを得るに至るのである。その間学校経営の計画、ブリュッセルへの留学、学校設立計画の挫折など、外的にも多様な経験を苦しむことになるが、Angria 物語におけるとは正反対に“plain and homely”¹⁾なものを目指した *The Professor* による再出発、およびそれが認められないことによる *Jane Eyre* への方向転換と成功、さらにその後の成熟については、また稿を改めなければならない。

1) “Author’s Preface” in *The Professor*.

SELECT BIBLIOGRAPHY

A. Primary Sources

1. *Legends of Angria*. Compiled by Fannie E. Ratchford with the collaboration of William Clyde DeVane. Yale University Press, 1933.
2. *Five Novelettes*. By Charlotte Brontë. Transcribed from the original manuscript and edited by Winifred Gérin. The Folio Press, 1971.
3. *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Branwell Brontë* (The Shakespeare Head Brontë), 2 vols., 1938.
4. *The Poems of Charlotte Brontë and Patrick Branwell Brontë* (The Shakespeare Head Brontë), 1934.
5. *The Brontës: Their Lives, Friendships & Correspondence* (The Shakespeare Head Brontë), 4 vols., 1932.
6. *The Brontës: Life and Letters*. By Clement Shorter (First published 1908; Haskell House Publishers Ltd., New York), 1969.

B. Secondary Sources

1. Gaskell, Mrs., *The Life of Charlotte Brontë*.
2. Gérin, Winifred, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius*. Oxford, 1967.
3. Hanson, Lawrence and E. M., *The Four Brontës*. Oxford University Press, 1949.
4. Knies, Earl A., *The Art of Charlotte Brontë*. Ohio University Press, 1969.
5. Ratchford, Fannie E., *The Brontës' Web of Childhood*. Columbia University Press, 1941.
6. Tillotson, Kathleen, *Novels of the Eighteen-Forties*. Oxford, 1954.